



TITLE:

雜報

AUTHOR(S):

CITATION:

雜報. 天界 1927, 7(74): 223-224

ISSUE DATE:

1927-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161103>

RIGHT:

雑

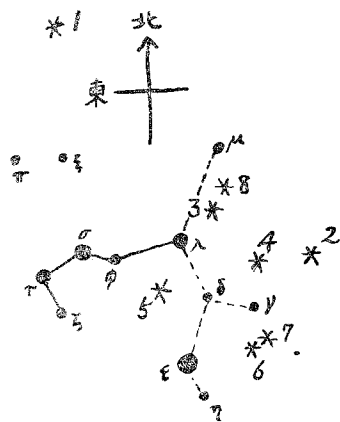
報

●いて座に第八新星発見 近着のハーヴァード学院ブレテン第848 號によれば、ミス・カノン (Miss A. J. Cannon) はいて星座に一つの新星を発見したといふ。位置は、(1900年の分點で)、

赤經=18h 11m 12s 赤緯=-23°40.73

であつて、天の冬至點の東3度弱の所である。報告によると、1926年7月16日以前の寫眞版には現れてゐないから、確かに、13等級以下であつたに相違ないのだが、同年7月30日の寫眞には俄然8.6等級の星として出現し、其の後漸次衰へて、同年9月27日には13等以下に落ちて了つた。スペクトルは未知である。

これはいて座に今までに発見された第八番目の新星である。この序でに、下に此のいて星座の新星の一覽表を掲げる。



番號	位置(1900)		光 輝		出現年	發 見 者
	赤 經	赤 緯	最大	現今		
1	18 ^h 56 ^m 12 ^s	−13°18'2	4.7	14以下	1898	フ レ ミ ン グ 夫人
2	17 53 49	−27 32.8	7.8	10.5	1910	同
3	18 13 48	−25 13.5	8.5	13以下	1899	ミ ス ・ カ ノ ン
4	18 0 27	−27 26.5	10.4	16以下	1901	同
5	18 25 42	−29 28.0	7.	14以下	1919	ミ ス ・ ウ ヅ
6	18 2 31	−32 29.1	7.1	17以下	1905	同
7	17 59 44	−31 44.9	8.	17 以下	1914	同
8	18 11 12	−23 40.3	8.6	13以下	1926	ミ ス ・ カ ノ ン

悉く之等はハーヴァードの寫眞板上に発見されたものである。別圖は此等の星の大體の位置を示す。此の邊りは銀河の中であつて、従つて、今後も續々新「新星」が発見されることであらう。

●ペルセ座二重星團の視差 カシオペアとペルセとの間の銀河中に、肉眼にも明らかに見える此の二つの星團の距離については以前から種々の推定が行はれてゐるが、最近の二三の結果による

と、視差を、

ラープ(Raab)氏は 0."0021

ドイグ(P. Doig)氏 0.0020

パンネクーク(Pannekoeck)氏 0.002

と出してゐるが、近頃リク天文台で

トランプラー(R. Trumpler)氏は

0."0044

といふ數値を得た。しかしこれは星團の中央部にある大質量のA型星の光輝から算出したのであつて、多少大き過ぎるきらひがある。やはり此の星團の視差としては0."003或はそれ以下と見るのを穩當とする。故に距離はほゞ400パーセク即ち1000光年前後である。

●はくてう座61番星の連星軌道 此の「はくてう座61番星」と呼ばれる星は、固有運動が毎年5."3もあるといふ(十八世紀末ピアジ(G. Piazzi)発見)ので全天の星の第六番目にあるし、又、視差が0."806(1838年にベセル Bessel が最初の視差を測つた)なので、全天の星の中で第十一位の近距離の星であるが、1753年ブラドレイ (James Bradley) が二重星

たることを発見し、其の後、マイヤー (Christian Meyer)、ハーシエル (W. Herschel)、ベセル等が観測し、1812年にはベセルが、ニュートンの引力論を用ゐて、此の二重星の相互回轉週期はほぼ460年であるとした。其の後、ストループ (W. Struve) 等が非常に精密に観測をやつた結果、二つの星が殆んど平行に動いてゐる程なので、前記ベセルの週期はむしろ500乃至600年に近いとなつた。ところが1878年に佛國フランマリオン (Camille Flammarion) は昔しからの總ての観測を調査して遂に「此の一對(つゝい)の星は相互に軌道運動をしてゐない」と言つたこともある。1888年にはペテルス (Peters) が又軌道の計算を試みて、週期783年といふ結果を得た。それから後、1906年、バーナム (S. W. Burnham) がかの有名な「二重星總目錄」(General Catalogue of Double Stars) を出版した時、又、此の星を研究して、やはり此の二星は只直線運動のみをやつてゐる特殊型のものと、しゝ座が星や、へびつかひ座36番星、みづかめ座58番星等を皆此の類とした。

最近、フランス國ペーズ (P. Baize) が1821年から1926年までの観測から算出した所によると、可なり見事な楕圓軌道であつて、其の軌道要素は

近星點通過時期	1978年頃
長徑の位置角	159度
軌道面の傾斜角	45度ぐらゐ
軌道楕圓の離心率	0.013
長半徑の長さ	32."8
週期	756年
回轉は	逆行

之れで見ると、軌道は珍らしく圓形に近いもので、其の長半徑の大きなことは、二重星全體中の第一位である。因みに、之れに次ぐ大きさの長半徑を舉げて見ると、

順	星名	長半徑
1	はくてう座61番星	32."8
2	センタウル座ア星	17.7
3	カシオペア座エー星	12.2

さゝいふ順序である。

此のはくてう座61番星の軌道の大きさは、我が太陽系の大きさ(海王星の軌道)の約107倍となるわけである。

●太陽黒點とラヂオ 米國ラヂオ工學院(Institute of Radio Engineers)に於いてピカード (G. W. Pickard) 氏が發表したのに據ると、太陽黒點が増せば放送ラヂオの聴取は悪くなるが、34メートル前後の短波のものは却つて好くなるさゝいふ之れは先頃のロンドンとニューヨークとの間の長距離無線電話試験に、長波と短波とを同時に使用して得た経験である由。

ピカード氏は早くから太陽黒點や地磁氣嵐やラヂオ聴取状態を研究し、殊に1926年三月以來はシカゴ市の WBBM 放送局から出る波長226メートルの電波を試験した結果、米國海岸測地局 (U. S. Coast and Geodetic Survey) がメリーランド州チェルテナム (Cheltenham) に經營してゐる磁氣観測所の示す地磁氣變動と其の時のラヂオ聴取状態との間には密接な關係があることを知つた。但し、ピカード氏の証言する所によれば、毎月平均の値には此の關係が明らかでないが、毎週の平均を取つて見ると、『太陽黒點活動の増加する時は、地磁氣嵐が増し、ラヂオ聴取は悪くなる。』氏は又、曰く、『ラヂオ聴取と氣象との間には大した關係は無いらしい。何となれば、太陽活動や、磁氣嵐は、全く世界共通の事件であるが、天氣さゝいふものはごく一地方的のものあつて、全世界の氣象状況を分析して見ると、太陽黒點と氣象との關係は、或る地方では存在し、又他の地方では存在しないなど、まち々々である。……又、WBBM 局の聴取状態はヨーロッパの諸所の放送局の聴取状態とほとんど同じである。一般に言へば、ラヂオ聴取は、太陽黒點や黒點群が太陽面の真正面中央にある時に最も著しく影響される』と。

●R. A. S. 金牌はシレシンジヤ教授へ 去る二月十一日英國のローヤル天文學會の定期總會に於いて、例年の通り、學界の功勞者に贈られる金牌は、米國エール大學天文台長シレシンジヤ (F. Schlesinger) 教授に贈られた。ローヤル學會長ジョーンズ (J. H. Jeans) 氏はシレシンジヤ氏の「恒星視差の研究及び天體寫眞術の研究」に關する推賞演説をした由。